

季刊

新しいやきものの誌

やきものを「見る、買う、つくる、使う」楽しみ

双葉社
スーパームック

陶磁郎

TOJIRO

48

と
JUNON

特集

あの陶芸家が、
あなたのための
器をつくります

1995➤2006

『陶磁郎』
の12年



本号で終刊。
ありがとうございました。

さんは、腰をかがめず、そして大きな作品を安定させて焼きたいという実用性を考慮したサイズの窯窯を築いた。土は主にニュージャージーから取り寄せ、器には表情を作るためにあえて石が入っているものを、オブジェには、いろいろな種類の土が混ざったものを使うこともある。薪は主にマツ、カエドなどアトリエ周辺の木々を薪として調達。大きい作品は約一週間かけて焼き上げる。

焼成中の弟子には、音楽を聴くことを禁じている。火加減ややきもの状態の変化を視覚だけでなく、聴覚で確認することを身に付けてもらうためだ。窯焼きは、年に二、三回行われる。

「私は日本の文化や自然が好きですが、『日本のやきもの』を作っているわけではありません。薪を使った窯で焼いた作品を作るアーティストという、とても口マツティックに聞こえますが、私は観念論より実践的なものを重視しています。

陶芸家として、アメリカで生活していくことは大変です。実際にアメリカで陶芸家を目指す人は、大学やアート・スクールで教えたりして生計を立てている。そして気が付くと、生活のためにコンセプチュアル・アートを作るようになっていたりするのです。しかし、少なくともチームや私は、日本のやきもの歴史や技術なくとも、日本ならではの繊細な美意識を理解した上で、心を込め、日本ならではの繊細な美意識を追求しますが、自分たちの感性と経験に基づいたオリジナル作品を伝統的な日本のやきものが持つ不完全な美というものを伝えられればいいですね」

花入に例えて言うならば、花が入る遊びを作品に残したいと言うシャピロさん。日本ならではの奥ゆかしさを尊重した作品作りを体得している彼は、繊細さを称えた不完全なる美を頭で理解するだけではなく、実際に観て触れて良さを知ってもらうため、ニューヨークのコレクターたちのための日本へのツアーや、フラン

親日家であるシャピロさんは、日本人の奥様のひな子さんと二人のお子さんと共に、アトリエのある敷地内に暮らしている。シャピロさんの三〇年以上に及ぶ陶芸家としての人生において、制作の環境、仕事場、家族、生活、それに何一つとして欠かせない重要な要素なのである。

アトリエを訪れた夏の日、シャピロさんは日本蕎麦でもてなしてくれた。その蕎麦と出し汁の味は、ニューヨークにいることを忘れてしまうほどに本格的で格別だった。

窯窯の魅力伝える

シャピロさんは、「弟」のような存在であるティムさんの作品を、「観れば観るほど深みが増し、そのたびに気付かなかったところが観えてくる」と賞賛する。そんなティムさんは、初めて備前焼を見たとき、「不恰好な形だな。どこがいいのかまったく理解できない」という印象を持ったそうだ。

しかし学生の頃、課外授業で窯入れ作業を見学して、やきもの作りの面白さに触れ、開眼。それをきっかけに大学で陶芸について学び、学士号や修士号を取得する間、シャピロさんを通じて、隠崎隆一を紹介され、備前で二年間師事することになった。現在は、そのときの経験を元に、自らのアイデアを活かした焼締の作品を制作している。

窯窯を築く際、デザインは師匠である隠崎の窯に基づき、どんな形の作品にも適する火の効果を計算したと言う。その制作には友達の力を借り、二、三ヶ月を要した。そのための人件費は決して安くはなかったが、制作過程は楽しく、仕上がりに満足していると言う。

「この地は、自分の起源のように感じる」と言うほどに、自分のアトリエを構えた環境一帯を気に入っているティムさん。この場所は居るだけでリラックスでき、創作意欲を掻き立てられるそうだ。さらにはマツやカ



1967年 ニューヨークに生まれる。
1992年 ステイト・ユニヴァーシティ・オブ・ニューヨーク(SUNY)にて、陶芸における芸術学部の学士号(BFA)を取得。在学中より、ジェフ・シャピロのパート・タイム・アシスタントを務めた後、備前の隠崎隆一に師事。
1999年 マサチューセッツにスタジオを構えた後、ペンシルヴァニア・ステイト・ユニヴァーシティにて陶芸における芸術学部の修士号(MFA)を取得。現在地に窯窯を構える。

ティム・ローワン [Tim ROWAN]



「今後、大きな作品を焼くための

エデ、カシ、カンバなど薪用の木が簡単に調達できる自然の恩恵にも授かっている。

土は主にニュージャーシーとメリーランドから取り寄せ、器やオブジェ用には細かく精製した土を使い、時に混ぜられている石や炭などをそのまま取り除かず、仕上がりの表情として生かすこともある。カップなどを作る際は、ふるいにかけて、さらに細かくする。

「制作には敢えてルールを設けません。自分の希望と土の状態によって、お互いに対話するように、そのときに浮かんだアイデアや土の感触を生かした作品を作っています」

毎日、朝八時から夕方四時まで規則正しくやきもの作りに集中する生活をしているティムさん。窯入れ後、焼き上がりには一週間を要するが、火加減を調整するために二つのグループに分かれて寝すの番をすることも苦ではないそうだ。

ティムさんの作品はギャラリィやアート関係者から注目されているが、窯焚きをするときにワークシヨップを行うなど、興味を持ってくれた人なら誰でも、窯窯によって生まれる作品を実際に目で見て、手で触れてその良さを理解してもらおう機会を設けたり、アトリエの見学も随時行っているという。

シャピロさんと同様、ティムさんは窯窯を自らの作品を作るための道具と捉えているが、窯窯のあるアトリエ、彼らの作品や活動すべてが渾然一体となって、人々のやきものへの興味を高めることに繋がっているといえるだろう。



「無題」、高7.6cm、径10.2cm。



「無題」、高20.3cm、径20.3cm。

住所●149 Vly Atwood Road, Stone Ridge, NY 12484
電話●845-687-8906
URL●www.timrowan.com



兄であり、先輩として尊敬するシャピロさんが住んでいることも、ティムさんがこの地にアトリエを構えるきっかけになった。



「無題」、高18.0cm、径25.4cm。



家庭菜園の脇にピザ窯まで築いてしまった。この窯で焼いたピザは、絶妙だという。